

文芸活動の政治化とコモン・リーダーの育成 1930-1960

青木 敬子

(明治大学・非常勤講師)

はじめに

英国¹高等教育において、文学領域が成立したのは20世紀の初めであった。1930年代から文学雑誌が発行され、それらの中には雑誌を通じた文芸活動²によって読者の育成を目論むものがあった。具体的な文芸活動をあげると、1932年F. R. リーヴィス (Frank Raymond Leavis 1895-1978) による雑誌『スクルーティニー (Scrutiny)』、1949年リーヴィスの弟子であったデニス・トンプソン (Denys Thompson 1907-1988) の『英語の効用 (The Use of English)』、また『スクルーティニー』廃刊後の1959年には、ブライアン・コックス (Brian Cox 1928-2008) らによる、雑誌『クリティカル・クォーターリー (季刊批評³ *Critical Quarterly*)』(以下「CQ」と記す) などがある。これらの雑誌は主としてケンブリッジ大学出身者によって発行されているが、執筆者にはオックスフォード大学出身者も含まれる。本稿では特にケンブリッジ大学出身者を中心に、文芸活動から発展した読者育成の教育活動が、1970年代から始まる英国の教育改革運動に連動していた点を明らかにする。最初に1970年以前の文学の成立、文芸活動の歴史を辿る。そこで当時の英国伝統文学教育の意義や目的が、いかにその後の文学教育へ大きな影響を持つようになったかを考察する。これがまた1988年の教育改革において、伝統文学作品教育の強化につながると考える。次に前述した雑誌発行による文芸活動が、なぜ教育活動へと発展したのかについて、当時の社会的状況や執筆者たちの生き立ちなどを背景に考察する。というのもこれらの文芸活動に関わる知識人たちの出自に共通点がみられることから、英国の階級制度の変化や彼らの出自が、その後の活動に影響したと考えられるからである。

全体の内容は次の通りである。第1節では、1930年代から50年代の社会構造と英国文学の成立史を辿る。中でもリーヴィスの「スクルーティニー運動」における思想を整理し、リーヴィスが目指した文学教育について言及し、それ以降どのように教育や社会問題に影響を与えたかという課題について確認をする。第2節では当時の社会構造と関わる作家たち、文芸活動、作品を考察する。また第3節では1節と2節で考察した時代背景や、コックスらの文芸活動に影響を及ぼしたリーヴィスの思想を振り返りながら、その文芸活動が教員たちを教育改革運動へ動員していく経緯を考察する。

1. リーヴィスの文学教育思想

(1) 1930年代から50年代の社会構造と文学

1930年代は知識人、作家たちにとって公正な社会を求める闘い、ファシズムとの闘いであった。第二次大戦前夜の不安、恐怖からくる思いが作品に反映されていたのである。この時期の作家たちの多くはW. H. オーデン (Wystan Hugh Auden 1907-1973) を筆頭に特権的階級の出身であった。彼らは「オーデングループ」と呼ばれ、左翼文化に主導されていた (大石 1979, p.93)。続く40年代以降の作家たちには、ネオロマン主義と呼ばれる一方で、第二次大戦後の基幹諸産業の国営化政策による「福祉国家」への反発など、政治的な傾向があった。その流れに反して50年代の作家は政治的、革命的思想を放棄し、「地道な実証主義」であった (大石 1979, p.43)。またこの時期、福祉国家体制の進行の中で、下層階級がある程度解放された。というのも戦後の教育改革 (1944年教育法) の中、開かれた奨学資金獲得のルートにより、多くの「奨学資金学生 (Scholarship Boys)」が高等教育機関へ進学し、「新大学才人 (New University Wits)」⁴と呼ばれるような50年代を担う知識人、作家として輩出されたからである。この点から1950年代の文化は、中産階級と下層中産階級及び労働者階級の諸要素がかなりの融合をし、階級的差異は平準化されつつあったと考察される (大石 1979, p.90)。この50年代の社会構造変化については後述する。では、社会構造と英文学にはどのような関連性がみられるのだろうか。まず高等教育における英文学の学問的成立について、歴史的変遷を辿る。

19世紀半ばから、東インド会社などの公務員採用試験にも英文学が課されるようになり、外部環境である社会・経済団体から、大学教育における英文学教育制度の充実が求められるようになった (石原 2013, p.33)。また20世紀初頭の英文学は、高等教育機関ではなく専門学校や労働者専門学校、植民地の教育機関において、最初に課目として制度化された。それはパブリックスクールやケンブリッジ大学、オックスフォード大学のような聖域には入ることができなかった階層に、安価な「教養教育」を提供するものであった (Aoki 2009, p.139)。オックスフォード大学では1870年に神学部が設置され、この卒業要件の1つに英文学があり (石原 2013, p.34)、ケンブリッジ大学では1917年に英文学トライポスという卒業認定試験に英文学が導入されたことから、これらは各々の大学における英文学成立と考えられている (石原 2013; Tillyard 1958; Doyle 1989)。

その後、高等教育における英文学の学問的充実により、その地位は向上した。ウィドーソンは、1930年代前後の英文学成立の社会的意味を次のように考察する。すなわち「英国内で英文学を学ぶことは、労働者階級の国家への帰属意識や共感を育成し、他の階級との仲間意識を持たせる」というのである (Widdowson 1999, p.43)。それは、国内の階層階級や社会の分裂を防ぎ、社会構成員である国民に帰属意識をもたせて教育し、文明化するという国家政策であった (Widdowson 1999, pp.42-43)。以上の点から考察すると、英文学の「課目」、学問分野の成立は、文学の政治的役割の現前化であったと言える。このような時代に、国民を涵養し文化水準をあげるための教育に一身をささげた教育者が、F. R. リーヴィスであった。

(2) リーヴィスの文芸活動における基本的理念——なぜエリートへの教育なのか

1920年代初期は、英文学が研究に値する学問かどうか分からない時代であった。1930年代初頭には社会的にも高く評価されるようになり、精神的真髄とみなされるようになった。そのような時代にリーヴィスはケンブリッジ大学を拠点として文芸活動を継続した。1932-53年代に発行された代表的雑誌『スクルーティニー』は文学・政治・教育といったテーマを論じる総合誌であり、後に多くの文学者、教員に影響を与えた。教え子たちは教員や知識人、研究者や作家などで「リーヴィス派 (Leavisite)」と呼ばれる。リーヴィスの教育への関わり方であるが、中等教育においてはケンブリッジ大学出身の作家デニス・トンプソンとともに、『スクルーティニー』の発展としてグラマースクールと教員のために、『文化と環境：批評意識の養成 (*Culture and Environment: The Training of Critical Awareness*)』を執筆している。当時のグラマースクールは英語教育における革新的な教授法がなかったため、1945年前後において、英語教育は高等教育の文学教育に依存したやり方であった (Medway/Hardcastle/Brewis/Crook 2014, p.22)。またリーヴィスは高等教育における文学教育について『教育と大学 (*Education and the University*)』の中で、「批評活動行為による知性と感受性の涵養は確固たる判断力の育成であり、人生の中で正しい選択を可能にする」(Leavis 1979, p.35) と述べ、文学教育の中でも批評を要にしている。では次に文学批評を用いたリーヴィスの文学教育と、その目的について、彼の記述を通して考察する。

リーヴィスはサミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson 1709-1784) の時代、18世紀を回顧しながら、この時代がなぜ充実していたかを言及する。「18世紀は均質の優位性をもっている、つまり真の文化である。それはジョンソンのいうところの究極の権威であるコモン・リーダー⁵ (Common Reader) なのである。コモン・リーダーは特別にすばらしい誰かではなく、能力や教養がある読者層で、文化の伝統や鑑賞力の水準を表象する (Leavis 1932, p.3)」。リーヴィスは20世紀について新しいメディアの出現などにより、文化が大衆化していくと案じていた。しかし18世紀においては、伝統文化を重んじるという安定した文化であり、その環境において文化水準が高く、鑑賞力をもつコモン・リーダーが存在していたと考えている (石原 2013, p.46)。そこで20世紀においても18世紀と同様のコモン・リーダーのような存在が必要であり、育成すべきと考えた。それには多勢ではなく、少数の批評教育によってコモン・リーダーを育成し、その感性、知識を別の人へ伝授する。その結果として、国民の伝統や文化の水準が保たれるという考えである。このコモン・リーダーを詳細に研究した石原は、この概念がエリート教育のための方法論で読者層育成を目指すものであったことを明らかにし (石原 2013, p.50)、またイーグルトンはコモン・リーダーが選ばれた少数の個人であったことを示唆している (イーグルトン 1985, p.53)。山田はリーヴィスらが危惧していたのは、巨大な文化産業によって大衆が白痴化することであり、その前に人間的な価値を復権するための運動を起こすべく、エリートのグループを作ろうと考えていたと明言している (山田 2013, p.36)。

さらに読者層形成という観点では、リーヴィスの妻であり、かつての指導学生でもあったQ. D. リーヴィス⁶ (Q. D. Leavis 1906-1981) が、著書『小説と読者 (*Fiction and Reading Public*)』の中で、次のように言及している。

18世紀は『スペクテーター (*The Spectator*)』、19世紀は『エディンバラ・レビュー (*The Edinburgh Review*)』のような定期刊行物が、英国の社会的な意識において、重要な地位をしめていた。というのもそれらはゴシップやニュースの提供よりも重要な任務をもっていた……18世紀の読者層形成から19世紀までの伝統や権威は、定期刊行物によって守られた (Q. D. Leavis 1932, p.172)。

この記述よりリーヴィス夫妻は、定期購読者すなわち読者層が、伝統や権威を守っていくコモン・リーダーになりうると考えていたことが推測できる。なぜリーヴィスはコモン・リーダーとエリート教育に固執するのか。その理由はリーヴィスの『価値判断 (*Valuation*)』において表明されている。「万人が同じものを得るというデモクラシーにおける解釈に対しては抗議する」 (Leavis 1986, p.169)。さらに「率直に認めるが、私に関心を持っているのはエリート教育である」 (Leavis 1986, p.169)。以上の点からリーヴィスは、万人ではなく少数のコモン・リーダーが、一般の人々に影響を与えるエリートになるべきという考えを根底に抱いていた。

(3) 問題の所在

1930年代から50年代までのリーヴィスによる文芸活動の目的は、コモン・リーダーの育成とその少数派による、文化水準の安定と伝統の保持である。リーヴィスは1930年代から文化が大衆化したと考えていた。そこで文学批評によって少数派のエリートであるコモン・リーダーが育成されれば、教養は伝授されるとリーヴィスは考えていた。実際には高等教育においてのみならず、前述したデニス・トンプソンと共に、グラマースクールの教育にも力を注ぎ、教育を変革しようとした。しかしながら、リーヴィスは社会自体を変革しようとしたわけではない (イーグルトン 1985, p.53)。彼はあくまでも、文学教育を通じて教育を変えるという姿勢であった。では1950年代以降の文芸活動はどのようにリーヴィスの影響を受け変化し、社会変革ともいえる教育改革の方向をとることになったのか。この点が本研究の課題であり、次節以降詳しく考察する。

2. 1950年代の社会構造からの考察

(1) 1950年代までの「奨学資金学生」の状況

サイモンの先行研究によると、「19世紀当時の保守派、上流階級の人々は労働者階級に教育をすることは不要とみなしていた」 (サイモン1980, p.204)。しかしその後、抵抗勢力の度重なる要求に対する妥協案として下層階級の優秀者に「奨学金」を与えるという恩恵的な制度が19世紀に成立した (大石 1987, p.142)。また、1902年教育法によって地方教育当局 (Local Education Authority) が組織されると、貧しいが優秀な児童がそれを通じて奨学金を得て、グラマースクールに入学していることなども記録されている (サイモン1980, p.269)。同様の記述は1870年創立のロンドン、ハックニーグラマースクールの記録において、1907年から1930年の間に多くの労働者階級の子弟が入学しているとある (Medway/Hardcastle/Brewis/Crook 2014, p.22)。しかしながらこうした例は極めて少なく、依然として1902年以降も労働者階級や下層中産階級の子弟が、社

会から十分な教育の機会を与えられずにいた。このような状況の中「奨学資金学生」は特別な存在として、自分の出身階級を「脱階級 (declass)」することができたのである。しかしながら少数の「奨学資金学生」たちは、たとえ奨学金を得て就学したとしても、学校内で職員や教員からの差別を受けることもあった (サイモン1980, pp.304-305)。

「1944年教育法」は、変化に対する人々の大きな期待を担うものであった。「1944年教育法」は「二つの国民」を「一つの国民」への統合するものとして、すべての国民の子弟に11歳から15歳まで無償の義務的中等教育を提供するものであった。小学校卒業生のうち、11歳早期選抜試験 (Eleven Plus) の成績優秀者は、グラマースクールに進むことができようになり、その数は年々増加した (Medway/Hardcastle/Brewis/Crook 2014, p.22)。奨学金によってグラマースクールに進学し、さらにその上の大学へ進学する「奨学資金学生」は、自分の出身階級から「脱階級」さらに「超階級 (transclass)」するという意味で、社会的に複雑な存在であった。つまり下層中産階級もしくは、労働者階級から中産階級に移動するということは、家族とも学校関係者とも違う階級となり、二つの階級の板挟みになっていた。しかしながら20世紀の階級間移動は19世紀に比べ、かなりの程度自由になっていたことも明らかである。19世紀の階級間移動はチャールズ・ディケンズ⁷の『大いなる遺産 (Great Expectation)』にみられるように、主人公の飛躍的上昇移動は例外的であった (大石 1987, p.17)。一方、20世紀になると、教育機会の拡大などで階級間移動は、かなり自由に流動的になっている。そのため1950年代には下層中産階級もしくは、労働者階級の出身の知識人が多く活躍するようになった。特にレイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams 1921-1988)、リチャード・ホガート (Richard Hoggart 1918-2014) の存在は、学会や評議会における労働者階級出身者の登場として、大変注目された (大石 1979, p.93)。

(2) 「奨学資金学生」作家と「ムーヴメント (Movement)」文学⁸作家の台頭

前項の階級、特に1950年から60年の「脱階級」の問題は、1950年代に活躍した「ムーヴメント」文学の作家たちが、素材として扱っている。というのも彼らはほとんどが下層中産階級出身の「奨学資金学生」であったことから、自身の体験がテーマとして多く取り上げられたのである。主な作家としては、フィリップ・ラーキン (Philip Larkin 1922-1985)、キングスリー・エイミス (Kingsley Amis 1922-1995)、ジョン・ウエイン (John Wain 1925-1994) などが挙げられる。彼らはいずれもオクスフォード大学のセント・ジョン・カレッジの出身で、その学寮で出会い、作家や研究者といったこの時代のインテリゲンチヤ (知識人) として輩出された (大石 1987, p.52)。大石の考察では、「ムーヴメント」の作家たちは30年代、40年代の戦争や不況などの深刻なテーマ、革命主義的思想を放棄し、福祉国家的様相を帯びてきた50年代のイギリスの社会において、ある種の物質的、経済的豊かさを享受していたと言及される (大石 1987, p.55)。前述したが「ムーヴメント」文学作品のテーマは、「階級」もしくは「脱階級」である。それはディケンズのような想像的な「超階級」ではなく、現実を体験した「脱階級」を表現している。

次にその表現方法の二つの違いを対照する。第一に「奨学資金学生」出身で、顕著な活躍をしたホガートやウィリアムズが用いた、階級社会を色濃く反映させる方法、第二としてラーキンのように、階級問題を真っ向から取り組まず、現存のシステムへの妥協、折り合いをつけるという

やり方である。具体的な作品をみると、さらに「脱階級」の社会構造がみえてくるため、2つの例から考察する。①はリチャード・ホガート『読み書き能力の効用 (*The Uses of Literacy*)』で、階級社会を現前化させながら問題を示唆する方法、②はフィリップ・ラーキン『ジル (*Jill*)』で、階級社会を描くが、作品の中心は登場人物の一般的な心情で、社会問題としては扱わない方法である。

①『読み書き能力の効用』でホガートは、一般的に「民衆」という場合、誰を表すのかということ明らかにしながら、労働者階級の文化、生活など客観的事実を記述している。また登場人物である著者の「奨学資金学生」としての苦悩を、主観的に描く箇所もある(ホガート1974, pp.229-249)。特に「奨学資金学生」が上級学校に進むことで、両親、家族、近隣との関係で「脱階級」によって、根拠にあうところは、自身の経験を綴っている。その過程は著者にとって、いかに苦痛かということが明確に示唆される。やがて主人公が上級学校に進むと測り知れない知的刺激を受ける。しかしその学校の教師たちは、まるで自分を労働者階級の文化から切り離し、中産階級の諸価値へと導くようである、と他方では当惑したことも述べている(ホガート1974, p.238)。これが「階級の板挟み」であった。リチャード自身は「板挟み」であったゆえに、どちらの階級のことも批判でき、また客観的に分析することができるのである。たとえば労働者階級が文化的に貧困であるという、中産階級の視点をしりぞけるのは、彼は労働者階級が文化的に豊かであることを知っているからである。その一方で、労働者階級は中産階級のように、知性を識別的に働かせないで、ただ利己的な欲望のままに情報社会、消費社会の奴隷のように成り下がっていると批判できるのも、彼が「脱階級」している「奨学資金学生」出身だからである。

②『ジル』は、大学生であるジョン・ケンプの恋と失意の物語である。1940年、戦時下のオックスフォード大学に入学した時の一学期間が描かれている。ジョンは「奨学資金学生」で、労働者階級の子弟であり、寮の同室者である中産階級のクリストファー・ワーナーへの憧れを通して、心の葛藤が描かれる。ジルはジョンの架空の妹である。ジョンは理想化した妹をモチーフとして、クリストファーを羨ましがらせる話を作り、クリストファーの興味を引こうとする。階級の違いからの心の葛藤もあるが、ジョンがクリストファーの性質に惹かれていることが、作品の中心となっている(白川1997, p78)。階級問題は全面に出さず、心の葛藤が話の中心である。ラーキンは大学在学中、上層中産階級の大きな支配下において学ぶ「奨学資金学生」であった。しかし彼は、抑圧の中で過ごしたことを作品の中で顕在化したくないとも主張している。(大石1987; Morrison 1980)。そのためラーキンは、②の手法をとる作家たちの作品は、社会的、文化的説明をされないものであることから、作品において階級社会を現前化することを拒否しているのだと主張する。彼らの根底にあるのは、階級社会への敵意を著さないことである。彼らは大学の恩恵を受けているため、古い秩序に批判の目を向けることもできない。そのため明確な階級の外、つまり周縁化され、結果的に曖昧な立場に追い込まれてしまう。しかし彼らは「奨学資金学生」からオックスブリッジに入学できたことに対して誇りと感謝をもち、英国の社会で成功したことから、社会を肯定することが可能になったと考察される(Morrison 1980, p.75)。

さらに「奨学資金学生」はいずれもリーヴィスの影響を受けている。特に「ムーヴメント」文学の作家の中には、自分の作品においてリーヴィスの思想を表現するほど敬意を示すような、リ

ーヴィス派も含まれる。例えばエンライト (D. J. Enright 1920-2002) は、リーヴィスの影響を最も強く受けた弟子の一人として、『スクルーティニー』にも執筆している (Morrison 1980, p.31)。「ムーヴメント」文学の作家たちが読み手を考える時、それはリーヴィスの考えるコモン・リーダーと重なるものであった (Morrison 1980, p.126)。これは読み手の「標準化 (standard)」を期待するものであり、第1節第2項で述べた通り、リーヴィスは『スクルーティニー』や彼の著述において読者を育成し、それによって文化水準を均質にしようとしていた。同様に「ムーヴメント」文学の作家たちもリーヴィスのこうした考えに影響され、読者育成を試みようとしていたことがモリソンの分析からも考察できる (Morrison 1980, p.126)。この点については、ブライアン・コックスの自伝にも記述がある。「1950年代のリーヴィス伝統観における保守的批評が、ムーヴメント文学に根付いている」(Cox 1992, p.121)。「ムーヴメント」文学の作家たちは、読者をコモン・リーダーとして教育するという意識を強くもっていた。ブライアン・コックスらによる文学雑誌には、これらの「ムーヴメント」文学作家のほとんどが参加していることから、リーヴィス派の色がますます濃く反映されていたと考えられる。

(3) 社会構造を超えた「奨学資金学生」

ここまで述べた文芸活動は、主にケンブリッジ大学出身者が中心であった。さらに彼らは「奨学資金学生」出身で下層中産階級、または労働者階級の出身であった。この点はリーヴィスにも共通していた。

F. R. リーヴィスは、楽器商の息子として生まれ、ケンブリッジ大学において、歴史研究から英文学研究へと道を変更し、著述家の道へ進んだ。彼は「階級を超えたエリート」と呼ばれ、文学界ではジョンソン、アーノルド (Arnold Mathew 1822-1888) に続く伝統につらなる批評家である (ロジャーズ 1990, p.527)。商人の社会階級出身者としては、名門大学にはじめて入った人物とも言われている。(イーグルトン 1985, p.49)。またこの時代のケンブリッジ大学における主要な業績をもつ著名人たちも、いわゆる「小市民」の出であったが、彼らはいずれも階級を超えたエリートであった。リーヴィスは大学の体制に対して、革新的な反論を繰り返し行った。また大学だけではなく、文学を学問上認めないような思想や発言に対しても、リーヴィスはすべて批判、攻撃した。その代償として、リーヴィスは上級講師 (Reader) のまま退官している。後継であるホガートは、階級社会そのものを批判しても、2つの階級を平等に批判し労働党を裏切らない、成功した知識人となった。ブライアン・コックスは、ハル大学でホガートの後のポジションに就き、同様に大学のポストでは成功した肩書を得る。この違いは何か。恐らく社会構造の変化によって、ある程度階級が平準化したことで、下層中産階級の「脱階級」が増え、成功事例が多くなったことに起因すると推測される。それではリーヴィスはなぜ出世していないのか。1930年代リーヴィスの時代は、「脱階級」の事例も少なく、また出世するかどうかという問題ではなく、学問自体を確立させることが中心の時代であった。その中で自分の階級との関わりなく、文学によって少数のエリートを育成し、文化水準をあげるという目的をもつリーヴィスに対して、多くの「奨学資金学生」が希望をもつことができたと容易に推察できる。成功する仕方はみな同じではない。リチャードとウィリアムズのように「脱階級」が成功し、自分の育った階級を自著作品

に投影し、階級問題を現前化させる働きかけをする。また彼らは労働党支持を貫き、労働者階級の支援を続ける。また他方では「脱階級」とみられないような存在になり、「脱階級」を表立って言及せず社会の中で、階級問題に焦点を合わせないブライアン・コックスや「ムーヴメント」文学作家たちがいる。双方の文芸活動は変わらず継続していくものの、政治的な方向性は異なる。コックスらは教育黒書後保守党に入党するが、リチャード、ウィリアムズは労働党の支持ゆえ、CQという文芸活動から離れ、教育黒書発行への運動には参加しない。「脱階級」を成功させた文学者たちは、それぞれ「知識人」「作家」としての名声を博するが、結果として保守党／労働党へと政治的には分断された。

3. 文芸活動の政治化

(1) リーヴィスから継承した文芸活動

黒書の刊行で知られるブライアン・コックスと A. E. ダイソン (Anthony Edward Dyson 1928-2002) は1959年に文芸誌『クリティカル・クォーターリー』の発刊を開始した。この雑誌発刊の契機は、1953年にF. R. リーヴィスが発行していた『スクルーティニー』が廃刊したことにあった。当時多くの大学研究者が、この穴を埋めるべく雑誌が必要であるという認識をもっていた (Cox 1992, p.108)。そこでコックスとダイソンが、新しい季刊誌の刊行を企画したのである。前述したように1930から40年代、英国文学において、リーヴィスの与える影響は非常に大きく、彼が教鞭をとっていたケンブリッジ大学はもちろん、オックスフォード大学が輩出した知識人、作家たちへも大きな影響力を持っていた。しかしながら一方で、文学批評研究隆盛の時代が衰退をはじめたことで、リーヴィスの雑誌『スクルーティニー』は廃刊した。そのため後継に同様の雑誌を発行するには、何らかの策が必要であった。コックスらは、自らの雑誌が大きな影響力をもつために、単に若者の安っぽい雑誌とみられないよう、新しい主流になるような文学雑誌を創ることを目指したのである。そのためにもまず、権威のある研究者にアドバイザーとなることを依頼しようと考え、リチャード・ホガートらに依頼した。次にCQ編集委員会のメンバー候補となったケンブリッジ大学の学者を中心に委員への就任を依頼し、これも首尾よく快諾された。彼らのほとんどが「奨学資金学生」出身で執筆者も同様であった。つまり「脱階級」した文学研究者によって、リーヴィスの思想を今後も継続させる必要性から、この雑誌が発行へと至ったことが示唆される。

購読者の対象は、大学英文科の教員、学校教員など教育関係者であった。これは文芸活動の後に始める黒書運動への発展に、大きく貢献する要因であった。発刊前の1958年から、定期的に彼らに案内状を送り、また世界中の著名な図書館へも案内状を送った。こうした活動が功を奏し、発行前に既に1,000人以上の購読者を獲得していた。こうして、1959年の春に創刊号が発行されたのである。創刊号では2,000部が印刷されたが、すぐに売り切れ、さらに1,000部を増刷しなければならなかった。その後、さらに5,000部が増刷されている (Cox 1992, p.110)。コックスが目指すところは、社会的な階級や文化などを超えて、広く文学にふれる読者へ間口をあけることであった。コックスがリーヴィスと明らかに違う点は、「ムーヴメント」文学と呼ばれる新しい文

学作品を、伝統的文学と同様に推奨することを目的としていた点である (CQ Vol.2, 1960, p.99)。大学教員になった当初は、リーヴィスと同様に伝統文学の価値を重視していたが、ラーキンをはじめとした「ムーヴメント」文学の作家とハル大学で出会い、新しい文学の価値を見出した。すなわち「ムーヴメント」文学の価値に開眼し、新しい作家たちを育てることを目指すようになった (Cox 1992, p.122)。

CQでは、新しい批評の学派を作ることを目的とするのではないことを明言したうえで、読者の関心や読み方を発展させ、詩を読むこと、詩を書くことへの関心をも促す文学教育が行われた。そのためにCQ第1巻の第3号 (1959) では、公募による詩集の出版が企画されている。この一般公募の際に、『オブザーバー』誌 (*The Observer*) がこの応募パンフレットを無料で作成してくれたおかげで、何百かの応募があった (Cox 1992, p.115)。CQとオブザーバーが協力して行うことで、新聞の読者やCQの読者に対し、コンペだけでなく、文芸活動を知らせることができ、これによっても知名度を上げたと考察できる。またCQにおいて次のような記述がある。

現代は1920年代や30年代とくらべ、詩というものは難しくはないのです。1960年代は人々が生活において、文化的な楽しみを享受する。購読者の拡大には良い時期になるでしょう (CQ Vol.2 No.2 1960, p.179)。

購読者の獲得に向け新しい文学が、リーヴィスの時代である20年代や30年代とは異なることが強調されている。それゆえ1960年代は作品が難しくないので、楽しみの読書をするには良い時期であることが述べられていると考察される。つまり、コックスの意図した文学教育は、彼の自伝やCQにも文化的な楽しみとなることが書かれているように、読者層を広げ、文学作品がそれほど難しいものではないことを暗示している。さらに多くの詩人、教育関係者、批評家たちによる寄稿を得、また、教育関係者や作家たちとの共同の編集作業を通して、コックスは多くの文化人と関わり、彼らをその後の運動へと動員していくことに成功したのである。コックスはこのように文芸活動から教育活動へと発展させ、雑誌の購読者を拡大する一方、学校教育関係者と連携し論議して、教育思想を深めていった。

(2) 『クリティカル・クォーターリー』の活動にみるエリート主義

前述したように、コックスは頻繁に自分たちの文学教育における活動は、リーヴィスの文学教育とは異なるという見解を述べている。しかしながらCQにおいて、リーヴィスの考える教育との類似性もみられる。CQ第1巻第4号においては、有名な古典的作品の読者は一般的な多数の人々ではなく、教育を受けてきた少数であると述べ、また、編集記後半 (CQ Vol.1, No.4. 1959, p.275) においては次の二点について言及されている。

- ① 教育を受けた (今までは少数であった) 読者が、今後大いに増えそうだということだ。
- ② 教育を受けた人々は明確で力強く、そして大衆メディアに影響を与えるだろう。批評家や教員はその識字ある聴衆を考慮し、読みの標準を上げるようなやり方を用いて、書くことを

教育するべきである。

これら2点の言及が示す読者教育は、まさにリーヴィスの言うところの「コモン・リーダー」である。前述したように、コックスはCQの活動の中で幅広い読者層の獲得を考えているが、もう一方ではこれらの点から、少数教育されたコモン・リーダー育成というエリート教育を示唆している。というのも①の教育を受けた読者が今後大いに増えるというのは、1944年の教育法によってすべての国民が教育を受けられるようになり、これ以降はさらに文学の読者数は拡大が見込まれるが、それと同時に少数であったコモン・リーダーの数が『スクルーティニー』の1930年代より増えるという期待感がうかがえる。また古典作品のみに焦点をあてた『スクルーティニー』とは異なり、CQは現代の作家作品というわかりやすい文学を提供し、多くの人々に文学を読んでもらうことを目的としているため、読者数全体が増えるという見込みである。教員や批評家にも執筆への配慮を促し、一般的に読みの水準をさらに上げるため、読書を促すだけでなく、詩作などの文芸活動をも推奨している。

このCQに関わる文学教育について、コックスはコモン・リーダー育成をするために、主として2つの活動基軸もつ。その第一はCQの発行による読者拡大であり、続く第二の活動は文学セミナーである。コックスは大学などの会場を借りて、読者、教員、批評家など多くの人を集めた。第一回は1961年で、詩のセミナーが開催された。セミナーは一般向けと教育者向けとを分けて開催されていた。というのはCQの購読者は教育関係者、特に学校の教員が多く、英国グラマースクールの英語教員の半数がメンバーであった (Cox 1992, p.119)。またもう一方ではシックスズフォームのセミナーも行われていた。コックスらが、シックスズフォーマーズのためのセミナーを行っていた理由は、明確には言及されていない。しかし1950年代のリーヴィスの文学教育の対象が、第1節第2項で述べたようにグラマースクールやシックスズフォーマーズにあった (Hilliard 2012, p.117) ことから、当時の文学者たちがシックスズフォーマーズの教育を重視していたと推測される。シックスズフォームの教員を対象としたセミナーの第一回は、マンチェスター大学のアッシュバーンホールにて行われた。それ以降は、ノッティンガム大学の施設で数回行われている。この活動は1970年代まで継続し、およそ16,000人の学生が参加した (Cox 1992, pp.118-120)。

このシックスズフォームのためのセミナーで多くの学生を集め、ケンブリッジ大学の読み⁹を教えていた。この点は、リーヴィスの考えるコモン・リーダーの育成と大きく重なる。コックスの自伝によれば、この活動がのちに黒書の活動に繋がっていったと述べられている (Cox 1992, p.121)。コックスは、文学教育のセミナーの運営を通して、多くの参加者と教育問題を共有することの重要性に気が付き、研究活動を中心にする学者としてではなく、大学教員として文学を教えることを優先したいという考えを強めていった (Cox 1992, p.121)。またセミナーにおける活動から、学校教育に興味を持ったコックスは、CQ第4巻の第2号 (1962) の編集記において、1962年5月に新しい会であるクリティカル・クォーターリー・ソサイエティ (Critical Quarterly Society) を発足したことを報告する。ここで発行する雑誌『クリティカル・サーベイ (Critical Survey)』 (以下、CS) は、特に学校教育問題を中心テーマとする予定であった (Cox 1992, p.119)。コックス

はCQの購読者へ、クリティカル・クォーターリー・ソサイエティへの入会を促し、会員は2500人へのぼったが会費だけでは運営できず、のちに財政的問題を生むことになった。

CQとCSを継続させることは、苦難が多く、コックスはこの雑誌運営に携わることである気づきがあった。以前のコックスには、伝統教育は政治から距離を置き中立性が維持されるべきという考えがあった(Cox 1992, p.154)。しかし1960年代の時代背景を考えると、なぜコックスが政治と無縁でいられなくなったかが推察できる。というのも平等主義の教育や進歩主義教育の影響によって、児童中心教育、児童の自由という状況が、教員への暴力の増加や、学習時間内の秩序が保たれないといった問題へと発展した。CSの会員である教員との交流の中で、コックスらはこの問題を認識し、最終的にCSにおいて取り上げることを検討する。さらに平等主義教育に反論する、政治家アングス・モードの書いた記事を読み、自分たちが取り組んでいる教育問題と関連付けたのであった。それによって進歩主義教育の問題が現前化し、伝統教育が反故にされる懸念が浮上する。しかし現実として教育問題を考えるための雑誌、CSの継続は困難であった。それゆえコックスらは伝統教育維持のために、保守党的な考えに追随しながら教育制度変革へ向け、政治的な働きかけを必要としたことが推察できる(Cox 1992, p.154)。

コックスはリーヴィス自身というよりは、『スクルーティニー』との距離を置きながら、ケンブリッジにおいて培われた文学批評によって、コモン・リーダーを育成した。大衆への読みの教育も文学教育には含まれるが、主としてCQはグラマースクールの教育や、シックスズフォームの読みの教育において、コモン・リーダーを育成しようとする。結果、それはエリート教育に基づくものとなった。その一方コックスらのCQにおける活動では、一般大衆も含めた購読者拡大を通して、賛同する人々を募り同志を増やしていった。これも結果、教育黒書へとつながる政治活動となる。詩作活動についても、コンペティションを企画し、マスメディアと接触する。これらはすべて教育黒書の反響を後押しするものとなった。文芸活動である文芸誌の発行と、文学教育を目的としたセミナー開催によるコモン・リーダー育成は、確実に教育黒書へ連動する。しかしながら教育黒書発行への最も大きな原動力は、リーヴィスの思想の影響によって、知識人たちが集まったことである。年代ごとに文芸活動を発展させ作家が集まり、CQ発刊の時にはすでにリーヴィス派の編集委員と作家が、ケンブリッジ大学からだけでなく、オックスフォード大学からも集まっていた。彼らは様々なところで「脱階級」についての苦労を共有し合える同士であった。境遇を同じくする強い絆やコモン・リーダー育成という自分たちの理想、目標を掲げ、文芸活動を通して文学教育を支えた。その文芸活動、文学教育はやがて賛同する人々と共に教育思想を持ち、政治性をもった教育黒書の発行、いわゆる教育黒書運動へと発展した。

まとめ

1960年代、コックスはもともと労働党支持であったが、保守党と代わり映えのしない政策に失望し、次第に労働党に対する支持を留保するようになっていた(Cox 1992, p.141)。大きな転機は、研究休暇時の滞在国アメリカより帰国した後に訪れた。平等主義、進歩主義教育によって学校教育が退廃していると感じ、それが総合制教育の所産であるという確信を抱いたことであった。

そんな折、新聞で保守党議員であるアンガス・モードの評論を読んだことで政治家としてのモードに興味を持ち、教育黒書への執筆を依頼した。教育黒書の発行時のこのような経緯、また、国書以後の思想が保守党のそれと重なることから、コックスは最初から保守党支持者であったように誤解され、また黒書自体も保守党から発信されたものと誤解されてきた（藤田 1990, pp.137-138）。しかし、教育黒書の根底にある思想は、国民の文化を高め、教養水準の均質化をし、さらには伝統教育を守ることであった。そしてこれらのすべては、もともとリーヴィスの文学教育に対する思想から派生している。

文学の歴史的な変化、変容は1950年代に顕著であった。この頃から文学教育および文芸活動は社会構造の変化とともに階級を超えた「超階級」の知識人が持つ、エリート教育観によって次第にイデオロギー性を帯びた活動となっていく。これが教育黒書へと発展したのである。教育黒書は保守党の政治的主張と重なり、調和するものとなったために、労働党支持を続けるホガートやウィリアムズはCQから離れていった。また「ムーヴメント」文学の作家においても、教育黒書に執筆したエイミス、執筆はしないがCQに残ったラーキンは、コックス同様保守党を支持するようになり、右翼的であるとのそしりを受けることとなる。しかし彼らの文芸活動は現代においても評価されている。コックスが先々関与する1988年教育法によって始まるナショナルカリキュラム英語科において、前述した現代詩人たちの作品は古典作品同様、シラバスに掲載されるに値するという評価を得る。彼らの「脱階級」は成功している。1960年代の文芸活動から黒書への経緯について、文学研究の分野では研究の蓄積はなされていないため、この評価の所以も表面化していない。また彼らの思想変化の詳細についても明らかにされていない。鍵となる各作家の思想の変化、また、黒書発行以後のコックスらの教育および政治活動については、今後改めて論じていきたい。

-
- 1 イギリス、ウェールズを示す。
 - 2 本論文では、文芸活動は、創作、出版などの活動を示し、文学教育とはそれらの作品を用いて教育することを表している。
 - 3 『季刊批評』と訳されることもあるが、本稿では『クリティカル・クォーターリー』の表記を通説とした。
 - 4 エリザベス朝の時代に、大学出の劇作家を大学才人（university wits）と呼んだのに対し、当時の「奨学資金学生」出身の大学進学をした作家の呼称。
 - 5 「コモン・リーダー」という概念であるが、ジョンソンの辞書簡約版序章に、この辞書は「コモン・リーダー」向けに書かれているとある（Lynch 2006, p.200）。先行研究の解釈は一般大衆と考えているが（江藤／芝垣／諏訪 2010；早川 2014）、ローゼンバーグ（Beth Carole Rosenberg）はそれを次のように定義している。すなわち、「コモン（common）」は単に「普通」ということを意味するのではなく、「十分な哲学的知識を得た」という意味である（Rosenberg 1995, p.21）。また「コモン・リーダー」は、現実的な考えを持ち、自分の本能を信じ、1つの規格として読んだ作品の価値を述べる。（Rosenberg 1995, p.22）。以上の点と後述するリーヴィスの言及からも、「コモン・リーダー」が意味するものは、「一般読者」という直訳ではなく、「目的をもった読者」を意味することが窺える
 - 6 Q. D. Leavisは階級的読者層をハイブロー（highbrow）ミドルブロー（middlebrow）、ローブロー

(lowbrow) というプロウの概念を取り入れ、読者層と文化的なレベルを高い (high) から低い (low) に分けた。

- 7 チャールズ・ディケンズ (Charles John Huffam Dickens 1812-1870) は、ヴィクトリア朝時代を代表するイギリスの小説家である。『大いなる遺産』において、主人公ピップは莫大な遺産によって労働者階級からジェントルマンの教育を受けることになる。
- 8 「ムーヴメント」文学の初出は、1954年10月1日発行の週刊誌『スペクテーター (Spectator)』のタイトルとして「ムーヴメント (文学) において (In the Movement)」。新しい文学の作家として紹介された。
- 9 ケンブリッジ大学の読みはここでは、リーヴィスが推奨した文学批評を中心とした読みの教育。1950年代のロンドン大学の英語教育とケンブリッジ大学の英語教育の違いについてはMedwayらによって記述がある (Medway/Hardcastle/Brewis/Crook 2014, p.34)。

【引用・参考文献】

- イーグルトン、テリー (1985) 『文学とは何か』 (大橋洋一訳)、岩波書店。
- 石原浩澄 (2013) 「F. R. リーヴィスと英文学部の理想」『竹治進教授退職記念論集』立命館大学法学会。
- 江藤秀一／芝垣茂／諏訪部仁 (2010) 『英国文化の巨人 サミュエル・ジョンソン』港の人。
- 大石俊一 (1979) 『「モダニズム」文学と現代イギリス文化』溪水社。
- 大石俊一 (1987) 『奨学金少年の文学』英潮社新社。
- サイモン、B (1980) 『イギリス教育史 第二巻』 (成田克矢訳)、亜紀書房。
- 白川計子 (1997) 「パーソナリティの牢獄——フィリップ・ラーキン『ジル』の考察」『大阪大学文学批評』第36号、大阪大学大学院英文学談話会、pp.78-89。
- 藤田弘之 (1990) 「イギリス保守党と教育黒書運動」『滋賀大学教育学部紀要』第40号、滋賀大学教育学部、pp.135-149。
- ホガート、リチャード (1974) 『読み書き能力の効用』 (香内三郎訳)、晶文社。
- 山田雄三 (2013) 『ニューレフトと呼ばれたモダニストたち——英語圏モダニズムの政治と文学』松柏社。
- ロジャーズ、パット編 (1990) 『図説 イギリス文学史』 (桜庭信之監訳)、大修館書店。

*

- Aoki, Keiko (2009) 'How the subject of English has assumed a political role in the latter half of the 20th century. *Japan - UK Forum Journal*. No.13, pp35-147.
- Arnold, Mathew (2009) *Culture and Anarchy*. Oxford UP; Reissue.
- Baldick, Chris (1987) *The Social Mission of English Criticism*. Oxford, Clarendon Press.
- Ball, Stephen (2008) *The Education Debate*, The Policy Press.
- Bell, Michael (1988) *F. R. Leavis*. London, Routledge.
- Cox, Brian (1991) *Cox on Cox*. London, Hodder and Stoughton.
- (1992) *The Great Betrayal*. London, Chapmans.
- Cox, C. B., Dyson, A. E. (eds) (1959) *Critical Quarterly*, The University Hul.Vol.1, No.1-4.
- (1960) *Critical Quarterly*. Vol.2, No.1-4. Oxford UP.
- (1962) *Critical Quarterly*. Vol.4, No.1-4. Oxford UP.
- (1969) *Black Paper: Fight for Education*, Critical Quarterly Society.

- Doyle, Brian (1989) *English & Englishness*. London, Routledge.
- Eagleton, Terry (1983) *Literary Theory: An Introduction*. London, Blackwell.
- Hilliard, Christopher (2012) *English as a vocation: the Scrutiny movement*, Oxford UP.
- Hoggart, Richard (1957) *The Uses of Literacy*, Penguin Books.
- Larkin, Philip (1975) *Jill*, Faber and Faber.
- Leavis, F. R. (1967) *English Literature In Our Time and The University*, Cambridge UP.
- (1979) *Education and the University*, Cambridge UP.
- (1932) *How to Teach Reading*, Cambridge UP.
- (1986) *Valuation in Criticism and Other Essays*, Cambridge UP.
- Leavis, Q. D. (1932) *Fiction and Reading Public*. Pimlico.
- Lynch, John T. (2006) *Anniversary Essays on Johnson's Dictionary*. Cambridge UP.
- Medway, P./Hardcastle, J./Brewis, G./Crook, D. (2014) *English Teachers In a Postwar Democracy: Emerging Choice in London Schools, 1945-1965*, Macmillan.
- Morrison, Blake (1980) *The Movement*, Oxford UP.
- Rosenberg, Beth Carole (1995) *Virginia Woolf and Samuel Johnson: common readers*, Macmillan Press.
- Tillyard, E. M. W. (1958) *The Muse Unchained*, Bowes & Bowes.
- Widdowson, Peter (1999) *Literature*, Routledge.

[Abstract]

Politicized Literature Movements and Common Readers in 1930-1960

Keiko AOKI

Meiji University (Part-time Lecturer)

English Literature education has been politicized since the beginning of the twentieth century. In this article, we will first show how literature education became politicized from 1930 to 1940. During that period, one of the most influential educational movements was the Scrutiny Movement led by F. R. Leavis who published the journal "*Scrutiny*". He attempted to apply his work to grammar schools because he wanted to maintain high standards of knowledge and literature in the face of 20th century popular culture. In addition, Leavis longed to develop the 18th century reader, called the "Common Reader" by Samuel Johnson. Leavis believed that the Common Reader represented the high cultural traditions and standards of taste in literature in the 18th century, and that it should also inform the education of elites in the 20th century. For Leavis, an elite minority was essential for the conservation and transmission of culture.

His successor Brian Cox and writers in what was called the "Movement Literature" established the journal "*Critical Quarterly*." They organized one of the most remarkable educational movements in the politicization of Literature Education, the *Black Paper* Movement of the 1960s. This movement focussed on current problems in schools and had been developing throughout the 1950s; its publications instigated a major shift in attitude to educational problems. Cox, his colleagues from Cambridge and the Movement writers brought together teachers who had never met but who shared similar anxieties about education. Editing his journal and conducting Literature seminars, Cox became deeply sensitive to the needs of teachers. Although Cox insisted that the purpose of his journal was different from that of the *Scrutiny* of Leavis of the 1930s, this paper will show some of their common elements viewed from the standpoint of literacy education. One common element is related to the social structure in the UK because Leavis, Cox and most of the Movement writers were originally from the lower-middle class, or "working class". Although they became famous intelligentsia, their social position had been "declassed" or "transclass", representing an ambiguous and marginalized condition in that society. Therefore, they shared a complicated "in between" social space. Despite this, they became well-known among the middle and lower classes for refusing to accept the

mass education of the 1950s. Based on the Common Reader of the 20th century, they tried to maintain high educational standards in order to foster a minority elite in the society.

This paper analyses in three sections how English Literature education as been politicized. Firstly, it shows how traditional literature education was reorganized by Leavis, and discusses how Leavis used his exalted position in the literary hierarchy to promote his own literary ideals through the education of young elites. Secondly, it traces the development of this traditional literary education in the 1950s and shows how the Movement literature writers were influenced by Leavis. Thirdly, it analyses how Cox promoted the *Black Paper* movement through his journal and seminars based upon the thoughts of Leavis. Thus, we show how the literature movement was politicized in the 1960s.